

神経症状の診かた・考えかた General Neurology のすすめ

福武敏夫 ● 著

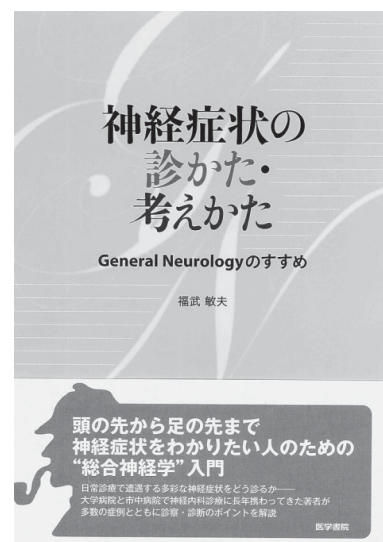
昭和大学教授・神経内科学／附属東病院病院長 河村 満

福武敏夫先生ご執筆の『神経症状の診かた・考えかた—General Neurology のすすめ』が出版されました。福武先生でなくては書くことができないユニークな内容です。神経内科医であれば初心者から上級医まで、広い範囲の先生方に太鼓判を押してお薦めできます。一般内科の先生方や、リハビリテーション医、メディカル・スタッフにも有益な本であると思います。本来難しいことがわかりやすく表現されているのがこの本の最も大きな特徴です。

全体は3つの部分から構成されています。すなわち、第Ⅰ編「日常診療で遭遇する患者」、第Ⅱ編「緊急処置が必要な患者」、第Ⅲ編「神経診察のポイントと画像診断のピットフォール」からなっており、第Ⅰ編の第7章はなんと「『奇妙』な症状」とされています。その前の第6章は、神経内科医があまり得意ではない「精神症状、高次脳機能障害」です。第Ⅰ編の第1章・2章・3章が、「頭痛」「めまい」「しびれ」で、いわゆるコモン・ディジーズであり、この本では奇妙な症状もコモンな病態も同等に扱われて、平等に並んでいるのです。第Ⅱ編の第3章は「急性球麻痺」そして第4章が「急性四肢麻痺」であり、その組み立ての特異さが際立っています。さ

らに、それぞれの章に多くの具体的症例が、病歴・診察内容・検査や診断の過程とともに掲載されていて、わかりやすい読み物をめざして執筆された著者の気持ちが伝わってきます。

ごく最近、昭和大学神経内科のカンファレンスで、カタレブシーを呈し、緊張病（カタトニア）症候群が疑われましたが、辺縁系脳炎も否定できない問題症例が提示されました。受持ちグループは、内外の最新文献を読み、よく消化して解説してくれました。しかし、「カタレブシー」「緊張病症候群」の定義や実際の症候内容は本来なかなか難しい点があり、カンファレンスはさらに簡潔な解説が欲しい、という雰囲気になりました。私は本書評を書くために、偶然この本を持っていました。もしかしたら書かれているかもしれないと思い、ページをめくると、右頭頂葉皮質下出血の急性期にみられた左上肢のカタレブシー症例の診察風景と頭部CT所見がちゃんと掲載され、平易に解説されていました（205頁）。緊張病症候群をきたす神経疾患も表できちんと示されており（206頁）、この中に辺縁系脳炎が確かに含まれていました。カンファレンスの最後、受持ちグループの「考察」が述べられた後にこの



本を紹介し、皆で回し読みして、私自身だけではなく医局員全員の理解が進みました。私たちの教室では、とても役に立つ本として、この本が認識されています。

福武先生と私は、千葉大学神経内科で10年以上ご一緒しました。当時の教授は平山恵造先生で、私たちは平山先生に直接ご指導いただき、大きな影響を受けました。序文を読むと、福武先生はご自身の診療態度を名探偵シャーロック・ホームズの観察や推理と同様である、と考えていることがわかります。平山先生から神経症候学の神髄を伝授され、ホームズを意識して神経疾患を持つ患者さんの症状・病態に向き合われて、独自の診かた・考えかたを開拓なさった福武先生が一人で作ったこの本は、広く読まれ、長く残るに違いない、と私は考えております。

B5・頁360 2014年
定価：本体5,000円＋税
[ISBN978-4-260-01941-5]

医学書院刊